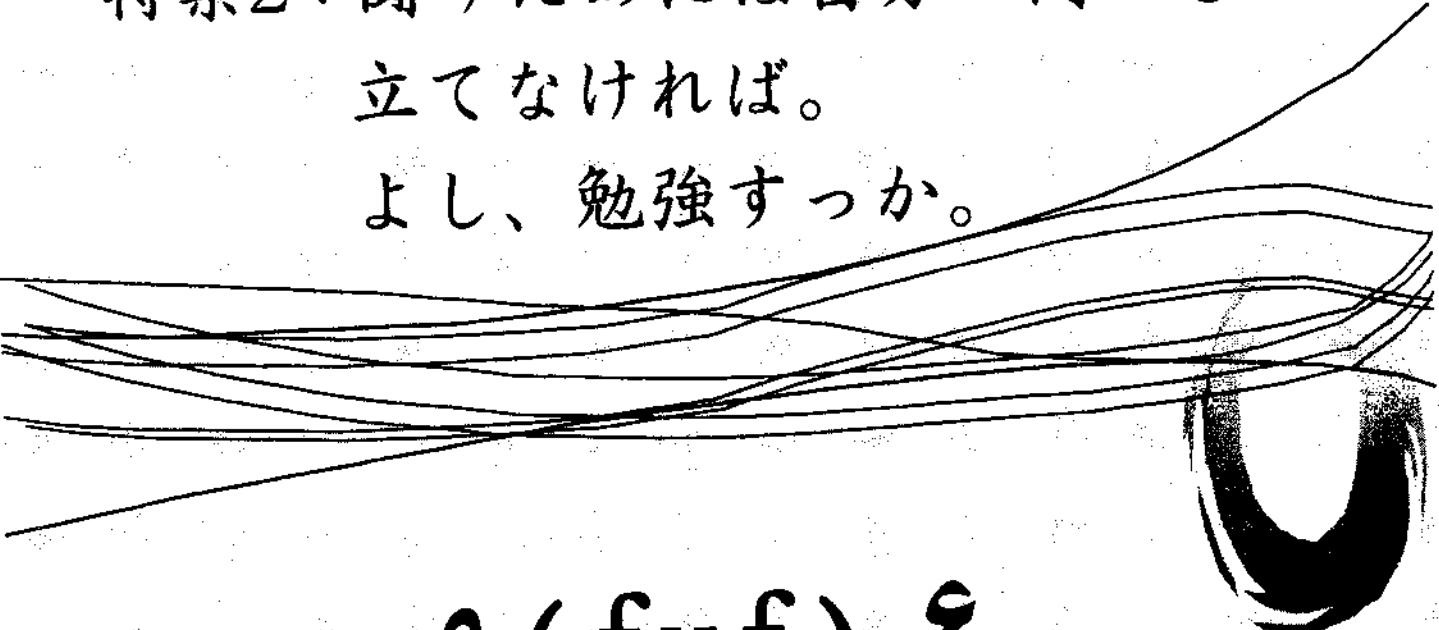


特集1：労働組合力（ぢから）を
スルメの如くかみしめる。

特集2：闘うためには自分の問いを
立てなければ。
よし、勉強すっか。



♀(fuf) ♀
vol. 28

「だが、兄弟！これは俺達の 運命じゃねえんだぞ。 力が不足なのだ、力が！」

アナキスト・中浜哲さんは、こ
ういう言葉を吐いたらしい。

現実的と言う言葉やら、対策と
言う言葉やら、物分りのいいよう
な言葉やら、したり顔で悦に入っ
た言葉やら、自分のことは省みら
ず他者を攻撃する言葉やらが蔓延
する日常、冷笑的に流し諦める日
常、馴らされた希望で流す日常、
天皇制国家日本に流れるなすがま
まの自然的な日常。

そういう日常に、労働組合とは、
自分と他者に問い続け、生きるた
めの力を自分たち自身で創り示す
ものではないだろうか！？
そういう日常に、労働組合とは、
亀裂を開け、生きるための言葉を
自分たち自身で永続的に思考し続
けて吐き続けるものではないだろ
うか！？

自分たち自身の力と言葉によっ
て、労働組合とは、新たな人間
と日常と社会を夢想するものでは
ないだろうか！？

この力と言葉は、誰かの名前を
書くことなんかで自分たち自身の
生を回収させるものではない。
この力と言葉は、誰かの名前を書
くことなんかで自分たち自身の生
を預けるものではない。

この力と言葉は、誰かの名前を
書くことなんかで破棄させる。

またこの力と言葉は、新しい運
動とやら、権力に気を遣う運動と
やら、一つの目標という名の元にな
り、一つの目標とする運動とやらには治
まらない。

労働組合は、浮上しない。暗い
坑道を深く深く掘り続ける。掘り
続ける事でただ一人の他者に出会
う。

労働組合は、浮上しない。暗い
坑道を深く深く掘り続ける。掘り
続ける事で根底から全てを覆す。

今、吐いた言葉たちは、理想的
と言う言葉やらで冷笑されるのだ
ろうか！？

自分は、そうは思わない。

なぜなら労働組合というもので
自分自身が現実的に感じ味わった
ものだから。そして今からも感じ
味わい続けたい。これこそが自分自
身にとつての欲望である。

(内野端樹)

**特集1：労働
組合力をスルメの
如くかみしめる。**

「ユニオン北九州・庄内衛生会分会の和野です。庄内は、FUF結成当初から、いろいろお世話になっていました。今回FUF通信の原稿依頼も喜んで引き受けましたが、なれないことなので皆さんに伝わるか不安ですが頑張ってみます。

僕が小さい頃、テレビのニュースでストライキ決行！と見たことがありますが、まったく労働組合が権利だと知りませんでしたし、興味もなかった。社会人になって、ただ一生懸命がむしゃらに働けば給料も上がるんだと思っていました。しかし今の会社に入社して、公共の仕事だから労働条件がいいと思っていましたが、こんでもなかった。

差別や不正、人の入れ替わりは激しく、理不尽なことはかりでした。でも従業員同士は仲が良かったし、仕事も楽しかった。しかしある時、中間の従業員が保険に入れてもらえなかったり、給料をこまみされたり、それを会社に言うとは結局会社を辞めざるを得なくなりました。これはどうにかしないといけないと思い、弁護士・労働相談・労務書...といろんなところに相談に行きました。でも本気でチカラにならなくて、あきらめはありませんでした。やっとチカラになってくると労働組合経験者を知り合い、これが僕と労働組合との出会いでした。

で、二〇〇三年三人で労働組合を結成しまし

た。正確な不安でした。回交もめて、会社に就業規則を作らせ、有給休暇、健康診断、未加入者に各保険加入...と勝ち取って来ました。が、突如として会社は回交拒否をしてきて、〇四年三月に不当労働行為救済申立、五月には和解。しかし会社は不誠実回交を繰り返すので、再度不当労働行為救済申立をして争いましたが、組合の申立は、棄却・却下されました。その後会社は暴力をでっち上げ警察を呼んだり、他の従業員からは人権侵害や嫌がらせ、三人いた組合員は僕一人になり、うつ病にもなりました。本当つらかった。

このまま会社、組合を辞めようかと悩みましたが、このまま悔しい思いで辞めたら悔いが残ると思います。もう一度仕切り直して頑張ろうと決意し、二〇一一年十一月にユニオン北九州に入りました。翌年に六年ぶりに回交が開催され、最初は会社が不誠実な対応をするので、組合は徹底的に抗議。その後の回交では誠実な対応になりました。交渉を重ね、組合掲示板、有給休暇残日数を給与明細書に明示、組合員だけに差別的に行ってきた取りもなくなりました。また〇三年から要求していた退職金制度も勝ち取ることもできました。春闘での賃金や夏冬の賞与も毎年アップしています。今年一六年には、元組合員も組合に復帰しました。

庄内の労働組合結成から現在まで、振り返って、思いを語らせて頂きました。これだけのものを勝ち取ったんだと改めて思いました。あの時組合結成してなかったら、今でも不安の毎日だったでしょうし、理不尽なことがあっても社長に何も言えないでしょう。おかしなことでも社長にしがわれないといけない。あの時勇気を出して、組合結成して、実践実行したから、これだけのものを勝ち取り、回交では、社長に同等に言えるし、追及だってできる。なによりも不安だった自分が、今では楽しんでる。無知だった自分が、今では自信になっている。職場では少数だが、組合では仲間がたくさんいる。

経営者はいかに労働者を、奴隷、搾取するかしか考えていない。経営者同士の組織だってある。労働者だってせつかく労働三権や労働基準法といろんな武器があるのに、使わないのは絶対もったいない。もう労働組合は、僕に代わって生活の一部になっています。まだまだ未熟ですが、皆さんこれからもよろしくお願いします。

全国一般労働組合の全国協議会 北九州合同労働

組合(ユニオン北九州)書記次長

庄内衛生会分会長 和野和善

ど～してみんなは、組合の

街頭行動の状況について

街頭行動でチラシを配ってみて、チラシだけだとなかなか受け取らないなと思ひ、会議でチラシの他にティッシュを入れて配ってみたら、受け取って貰えるんじゃないかと提案しました。

今も昔も街頭行動に対して抵抗感がある人は多いですが、何かを始めるにしてもまずは提案することが大事なな思ひました。

デモに関して言えば、自分が組合に入った当初は労働組合って何っていうところから始まって、「ノブ」とか楽器を使って路上に出て自分達の主義主張を繰り返すのはなんだか変わった集団だなんて当時思っていました。

労働者が路上に出て、街を歩いてる人や車などを見て、何をしているんだろうこの人達はと思われたのは始めは恥ずかしかったですが、歩いてる内にいろんな景色があって勉強にはなったのではないかなとも思っています。

初めてデモに参加した時は、警察官や機動隊に囲まれてデモ行動自体が出来ずに寒いなと思つた次第です。何事も経験だったので良かったですが、あれから約8年以上経って変わった事っていうのは自分達の環境の変化に対して『抵抗感』がなくなってきたのではないかなと日々感じています。

労働運動に対して『抵抗』というのは悪い意味で囚われがちなですが、日々の生活において『抵抗』しなければ何も解決しないと感じています。まずは決心を持って取り組むことが大事じゃないかと思ひます。

労働運動において『抵抗』と『関心』は意味が違ひますが、関心を持たなければ押取されてしまひます。デモ行進は自分達の『抵抗』に対してのメッセージであり、今後も活かす上で重要なことだと考えています。

チラシ配りについては、ミーターの日にチラシ配りにティッシュを入れて渡してみたら、チラシを掴くペースが上がって良かったですが、まずは街頭行動で労働組合について関心を持っていただく事が重要だと考えています。

労働運動について、会議でワークルール検定についてメーリングリストで出されてまだまだ分からないことも多いですが、日々の基本的な勉強が大事ではないかと思ひます。

(見谷元)

「立ち上がる夜」について
いろいろ事情があったせいで、通信に投稿するのはクマです。

というか、街頭行動にできずずっと参加しなかったのですが、今年のミーターは何とか気力を振り絞ってティッシュ配りに参加しました。

fufuで最近新たに取り組み始めたティッシュ配り(正確にはティッシュ)そのものよりもティッシュの袋に入れたチラシのほうが重要なのですが、便宜的に「ティッシュ配り」と呼ぶことにします(笑)私には引力的なものを感じました。とにかくへんてこだけ配っていたときと比べて、受け取ってくれる

人が明らかに多いのです。

最初は嫌々ながらだったのが、最近積極的に加わってくれたのさなと一嬉し配れたことも手伝ってか、いつの間にか楽しくなっていました。もう冬ではありませんが、人の動きが違って大切な人となを再確認できました。

本題からは少しそれますが、NHKのあるドキュメンタリー番組で最近知ったことを付け加えます。フランスでは最近労働法が「改正」されたそうです。フランスはパリその他各地で毎晩のように何の組織や政党にも属さない普通の人たちが(参加者には白人もいれば黒人もいるし、いわゆる種族系もいれば中東系もいるというふうに多様)が自主的に集まって自分の気持ちや意見を述べ合っていて議論するようになり、誰ともなくその集いを「NUT DEBOUT」

「立ち上がる夜」と呼ぶようになったそうです。その集いはさっばら、参加者たちが各自自分の興味あるテーマでグループを作り、その中でディスカッションをするという方法を探っているといいますが、映像で見た限りでは、労働法「改正」に反対の人も賛成の人も、互いの立場を尊重しながらも本音で語り、しかも対話を築く気持ちを持ち続けているように見えます。ディスカッション以外では、アート作品の展示やパフォーマンスの披露などもあったよう

です。

いつか私も街頭行動で、例えばそのようなフランスでの取り組みをいくつか見ようと思ひます。

(Mのひまわり)

特集2・闘うためには自分の問いを立てなければ。よし、勉強すっか。

【学問会】

闘と腐敗の社会を生き抜くために

リーダーシップとは何か？ ロナルド・ハイフェッツの学び

公教商からはじき出され、「正社員」にもなれずとも逞しく生きる「FUF」組合員は、物事の本質を見抜こうとする嗅覚は鋭く、真実を学ぶことを欲している。活動の一環としても、職場で使えるワークルルを学んだり、上映会や読書会の学習も日常的に行い意識的に学ぶ場を作っているが、そうしなければFUFを始めるとしたマスメディアやネット情報に抗うことは困難な社会だ。今私たちが生きる社会は、「欺瞞＝差別」と「腐敗＝金」にまみれている。真実や正義を求めようとする信条や思想がき消された社会を変革するために、わいわいわ自虐で学ぶしかない。

このFUFは、今回組合員の提案は、NHK白熱教室で話題となったロナルド・ハイフェッツの「リーダーシップとは何か？」。ハイ

フェッツはリーダーシップについて30年以上研究し続けるが、すでに20年前に日本で翻訳されたものが出版されており、その時点ですでに「私たちは今日、公的私的な生活さまざまな分野でリーダーシップの危機に直面している」と分析する。時既に遅しの感はないが参考になる言葉は多々あるように思えた。労働運動的には労働組合という組織においてであり、労働を提供する場においては職場であって、地域やさまざまなコミュニティにおいてである。

長時間労働や多くの労基法違反が野放しにされたまま解決のみちすじが見えない根幹には、会社自体が組織の体をなしていないというリーダーシップの問題を本誌丸田原稿が指し示している。このことは、究極私たちの生きる社会すべてにおいてであり、国家のあり方をも問うこととなることを、ハイフェッツが以下のように述べている。

「オーソリティに不適当な期待を持つのではなく、自分たちの適応能力を高める、リーダーシップについての異なる考え方と新しい社会契約が必要なのである。私たちは市民生活のあり

方と市民権の意味を考え直し、再活性化する必要がある」と。

オーソリティとは権威であり、専門の道に通じて実力を持つと言われる人に不適当な期待を持つということ。それは、「安倍は辞めろ」と何万回叫んでも何の意味もないということであり、ひいては専門的肩書きを持つ者など現実にはないということを肝に銘じるということである。すなわちこれらはすべて自身身がその実力を身につけるしかないということを意味する。

究極ハイフェッツは、「人は問いしか手にしていないでもリードすることができる」として「リーダーシップは人が目をそらしている問題に手をつけるところから始まる。だから人々の反感をかい、危険な目に遭うこともある」という。FUFは、これからも問い続け、勇気を持ち、リードしていきたい。

(たけちのまき)

パナマ文書

二〇一六年四月、衝撃の出来事が世界で起こった。パナマ文書 (The Panama papers) だ。

パナマ文書とは、タックスヘイブン (租税回避地) の会社の設立などを手掛ける中米パナマの法律事務所から流出した文書のことだ。租税回避地であるパナマ共和国を利用したとされる著名人や富裕層や企業などの名前が載った文書のことだ。タックスヘイブンというのは、富めるものがより富めるようなシステムに一層拍車をかけるものだ。

パナマ文書の報道は、二〇一六年四月に一度行われたが、それはあくまでも以前公表した情報であった。その後、五月十日に最新の記事を公表するという「COI」の報道があったのである。

日本のマスコミはその間、外務省の政治資金問題を一斉に報

道し、終わったはずのオッキを軽く蒸し返したり、パナマ文書に係る情報には及び腰であったことは、この先の歴史に鑑みられるべき事実である。五月十日を過ぎた今でも、パナマ文書の記事は余り見ることはない。そして、数少ない記事の中では、パナマ文書に記載された企業家や著名人はそろって「利用していたが、逆に換した。租税回避が目的ではない」など、皆が揃って同じ言葉を口にしている。まさにカルト国家の真の姿が見え隠れするような出来事であった。

彼らが租税回避地を利用していただけはもうすずすわかっていた。しかし、ここまで詳細に、個人名や企業名などが明らかにすることはなかった。まさに「臨期的」といえる文書である。

我々は企業の搾取と闘うために労働運動を続けなければならない。

ただし、労働運動だけでは不十分だといつても今更には遅いかもしれない。

(武田啓詩)

巷の嘘に騙されない
ためにも、
パナマ文書くらい
しっておかなきゃ
と、思い立ったら学習会

長時間労働が常態化した職場をいかにして変えるか(承前)

前回の原稿では、長時間労働が常態化している現場で、その状況を打破するためには、先ずは早く帰るといふことを実践し続けるしかないという結論に至った。今現在も、それを実践し続けている。同僚の反感は買っていない...と思う。今のところは時間外に現場が終われば、そのまま帰ってしまうということで、同僚の認識は定着した。どうしてもやらなければならぬことがあって現場の後には会社に戻ったら、逆に見られてしまった。

さて、長時間労働の常態化を経営側はどう見ているのか。問題だということには認識はしている。会社に入ったばかりのころ、社長が苦々しげに「みんな遅くまで帰って...」ということをや、僕に話したことがある。色々と対策を行い若干の改善はもたらされてはいるものの、状況が大きく変わるといふことには至ってはいない。

自分が早く帰るのは、会社のためにそうしているのだと同僚は上司に対して言っている。冗談めかしてはいるものの、実際にその通りだ。というのも、前回の繰り返しになるが、もしそうしなかったならば、実労働時間を記した出勤簿と、

虚偽の労働時間を記した出勤簿の2重の出勤簿が存在することになってしまふから。そして、それらを役所に持っていくのは、会社が潰れるだろう。現在、会社は雇用関係の助成金を受給しているが、虚偽の書類を提出していたということになれば、まきれもない不正受給となってしまう。下手をすれば、警察沙汰だ。会社が潰れるだけではなく、刑事事件にもなってしまうかねない。経営上のリスク管理という観点からしても大問題だ。

この点をめぐって、要求書を出して団体交渉をするべきだろう。つまり、三六協定を超える労働時間になってしまふとしても出勤簿に実際の労働時間を記すようにすることで、出勤簿が二重に存在しないようにすること。また、そのように記録された残業代についてはすべて支払うことという要求内容で、交渉を行う。

だが、現状で交渉を行ったとしても、長時間労働を減らすことは残念ながら不可能だろう。その理由は二つあるが、今回はそのうちの1つについて取り上げることにしよう。もう1つは次回に回すことにしよう。長時間労働の常態化をもたらす1つの理由は、組織が組織の体をなしていない、あるいは業務の遂行体制そのものが確立していないというところにあるが

らだ。そのような状態では、業務の全体量を把握して計画性をもって仕事をやるというのは不可能で、場当たり的に目の前の仕事をこなすだけになってしまふ。

早く帰るためには仕事を切り上げるタイムリミットを判断できなければならぬわけだが、そのためには業務の全体像や全体量を一定程度把握しておくことがその前提となる。だが場当たりに仕事をしていたら、その前提条件が成り立たず、仕事を切り上げるタイムリミットを判断できず長時間会社にいることで何かをしている気になり、同時に多忙感が生じる。

会社創設以来、体制作りや組織作りが出来ていない...ということはい言ひ換えるならば、長時間労働を減らす方法が存在していないということである。そのような状況で会社と交渉をしたとしても、現状がそう大きく変わることには期待できない。

それを会社に考えさせるのが交渉だとしても、今更そんなことを考え付くとも思えない。だから、交渉の準備段階としてそのような業務の遂行体制あるいは組織の形態をどうすべきかについて、こちら側で詰めて考えておく必要がある。当然それは書えてながらも、今は、その準備段階として早く帰る続けていることだ。

(丸田弘毅)

お前らのために早く帰ってやってんだぜ？ いや、ホントに。

私が敬愛してやまない女性は資格を取るのが趣味のような人だった。

いつも何かしらの勉強をしていて受験日までの残り日数を気にかけている。

当初は仕事をする上で必要になる技能や知識を得ようとしているのだと思っていたが、無線や書道や言語など分野に統一性がないところをみると違うらしい。

気になったので実際に尋ねたことがある。

「どうしてそこまで資格をとることに執着するのですか？」

彼女は屈託なく笑いながら私の問いに答えてくれた。

「こうやって緊張感を保っていないと私はサボっちゃうから」

つまり、資格を取得するのが目的ではなく勉強を常態化するための手段だというのだ。

理屈としては筋が通っているが、そんなことをして疲れないのだろうか。

私だったら途中で息が詰まるか飽きるかして投げってしまうだろう。

しかし、彼女はそんな凡俗とは一線を画しているようだ。

「勉強したぶんだけ賢くなるから充実しているし楽しい。

面倒だとか嫌だとか感じることはないかな。友達も増えるしね」

こんな綺麗事も彼女の口から出ると抵抗なく受け入れてしまうから不思議である。

次に取得する資格を決めるべくカタログに目を通すときの表情は生き生きとしていた。

本当に心から「学び」を楽しんでいるのだと思う。

そしてこの姿勢があって始めて人生が彩りあるものになるのだろう。

向上心を忘れずに前向きに明るく生きる。

それが理想ではあるけども実践するのは難しい。

だが、「学ぶこと」がそこに近づく鍵なのは間違いない。

私も自分を戒めて日々勉強しないと叱られてしまいそうだ。

あの人の域に達するのは無理だが、今からでもやるだけやってみよう。

それが生きるということなのだから。

小川剛志



◆通信誌購読料及び活動へのカンパのお願い◆

- 年間の通信誌費とともに、fufの活動に賛同のカンパなどしていただけたら、ありがたいです。通信への感想なども是非お願いします。楽しみにお待ちしております。
- 通信費： 年間一口1000円
- 振込口座
名称： フリーターユニオン福岡
口座番号： 01710-4-92028
- 有期雇用でも、正規社員でも、ニートでもヒキコモリでも組合員になれます。組合費はだれでも月2000円。
- 働くこと、働いて生きることに悩んでいる人、いつでもご連絡ください！

- 第2、第4金曜日は、午後7時から定例会議です。
お気軽にお立ち寄りください！

- 電話、メール、いつでも相談や加入のことなど受けつけています。電話番号やメールアドレスなど、より詳しい情報については、フリーターユニオン福岡（fuf）のブログやホームページをご覧ください。

blog: <http://fufukuoka.blog.so-net.ne.jp/>

HP: <http://fufukuoka.web.fc2.com/>

奥付：2016年6月12日発行

